

コンピュータを利用したコミュニケーションと人間関係 (2)

——大学生の意識調査から——

中田美喜子

Computer-assisted Communication and Relationships

——Survey of University Students——

Mikiko NAKATA

Abstract

Internet communication is increasing due to PCs and mobile phones. In a college, we conducted a survey in terms of the aspects of self-disclosure and self-concealment and the nature of awareness with which people use actual and online communications. It was shown that there was a strong tendency to avoid the unambiguous communication of personal ideas and feelings due to prioritizing smooth interpersonal relationships with friends with whom the face-to-face communication was implemented.

はじめに

現代社会において、情報化が進み、パソコンや携帯電話の普及が増加傾向となっている。さらに、これら通信機器を用いたインターネット利用も増加している。そのため、インターネットを介した情報伝達が日常的に行われるようになっている。この情報伝達のやりとりは、年々規模を拡大し、近年では、インターネットの中でも CMC (Computer Mediated Communication: 2つ以上のコンピュータネットワークを渡る、ほかの人との交流を図るためのあらゆる形態: 以下 CMC と記す) の利用によって、今までの人間関係とは異なった人と人の繋がりが成立している。以前の人との出会いは、現実社会で人と人とが対面することでしかなかったが、現代社会においては、インターネットを使って出会うということが可能となっている。この出会いは、現実社会での出会いとは異なり、インターネット上で出会い、インターネットを通じて人間関係を形成していくのである。CMC の中でも代表的である SNS (Social Networking Site; 以下 SNS) は、自己の年齢、出身地、趣味や嗜好を記載し、それらを通じて、人間関係の構築

を図る会員制のサービスである。SNS で代表的なものとして挙げられるのは、株式会社ミクシィが2004年2月にサービス提供を開始した「mixi」である。この mixi は紹介制の SNS であり、学生から社会人など幅広い年代の人が会員登録を行っており、2010年4月にユーザー数が2,000万人を超えた。また、近年では Twitter や Facebook, GREE, モバゲータウンなどさまざまな SNS が提供され、年々 SNS のユーザーは増加していくと思われる。これら CMC や SNS より多く利用されている機能が電子メール（以下メールとする）である。現在、携帯電話は、若者のほぼ100%が所持しているとされている。携帯電話に付加されている、メール機能を使って、学生が友人とコミュニケーションを取ることが極めて日常的な時代となっている。しかし、このような媒体を介してのコミュニケーションは若者の対面コミュニケーションの減少を促す要因となったり、対人関係を展開していくソーシャルスキルの低下を助長するのではないかと懸念する声も挙がっている。しかし、その一方で友人間で連絡が取りやすくなったことで、人間関係が広がっているとも報告されている。このように、コミュニケーション手段が増えた中で、携帯電話はそれを利用する大学生にどのような影響を及ぼしているのであろうか。2011年、女子大生による調査を報告した（中田・記谷，2011）。その結果を2007年（尾上，2007）の調査と比較したところ、パソコンの所有率が16.4%から48.6%へ増加している。このことから一家に1台でパソコンを所有していた時代から1人に1台の時代へ変化していることが示された。今後もパソコンのコンパクト化が進み持ち運びやすくなり所有率は増加すると考えられる。情報伝達機器の利用状況や利用頻度について、2007年では SNS の利用頻度の回答として「毎日利用する」を選択した者が最も少なかったのに対し、中田ら（2011）の結果では「毎日利用する」を選択する者が最も多くなった。この結果は約5年の間に SNS が普及したことを示している。中田ら（2011）のアンケート結果ではメールを利用し、メールだけの知り合い（メル友）と会ったことがあるという者は43.6%であったが、2007年のアンケート結果では61.8%であった。メル友と会うと答える人数が減少の傾向にあるのには、ネット犯罪などが多いことや、若者が非対面コミュニケーションを求めるようになったのではないかと考えられた。

自己開示度は、中田ら（2011）では「情報伝達機器を通じて知り合った人と会ったことがあるか」、「情報伝達機器だけの友人と身近な友人で異なりを感じるか」の2項目に絞って自己開示度の高低群別に分析を行った。その結果「情報伝達機器を通じて知り合いと会ったことがあるか」という項目においては有意差が認められた。自己開示が高い人ほど積極的にメル友に会いに行く傾向が示された。しかし、「情報伝達機器だけの友人と身近な友人で異なりを感じるか」という項目で有意差は認められなかったため、情報伝達機器での友人と身近な友人とではまだ同じものとして考えられるところまではいたってないのではないかと考えられた。自己隠蔽度において、中田ら（2011）は有意差は認められなかった。

中田ら (2011) は女子大生のみによる調査であり, CMC が人間関係の構築に及ぼす影響について十分検討しているとは言えない。そのため, 本報告では男女大学生による調査を実施し検討を行った。

方 法

調査対象

広島県内の大学に通う学生380名を対象に質問紙調査を実施した。回収した質問紙の中で, 不備のある回答を除いた回答者は360名であった。回答者の男女の割合は, 男子98名, 女子262名であった。回答学年の内訳は1年生が185名, 2年生が72名, 3年生が68名, 4年生が35名, 年齢は18~24歳であった。また回答者の平均年齢は19.5歳であった。

調査方法

2011年10月, 各大学の講義開始時または終了時に質問紙「学生の携帯電話利用が人間関係に及ぼす影響についての調査」を配布して調査を実施・回収した。

質問紙を配布したのち以下の教示を与えた。

「携帯電話利用とインターネット使用が及ぼす人間関係の構築についての研究をしています。アンケートは携帯電話の使用, コミュニケーションツールの利用が, 人間関係にどのような影響を与えているかについての調査です。なお, このアンケートは学術論文に使用し, それ以外での使用は一切致しません。また, 匿名であり個人を特定するものではありません。お手数ですが, アンケートにご協力お願いします。」

回答が終了した者から質問紙を回収した。

調査内容

主な調査内容は「情報伝達機器の使用について」6項目, 「日ごろの友人関係について」6項目, 「携帯電話上の友人について」11項目, 「交友関係について (自己開示, 自己隠蔽)」16項目, 「携帯電話への依存について」14項目の5つのカテゴリーから構成される。

「情報伝達機器の使用について」は, 携帯電話所有の有無, 購入年齢, 携帯メールのやり取りの平均数, 携帯電話の利用事項などについて質問する項目であった。

「日ごろの友人関係について」は, 大学で一緒に生活している友人の人数, 大学内で親友と呼べる友人の人数, 大学以外での友人の人数, 大学以外で親友と呼べる友人の人数, 大学の友人と大学以外の友達の異なり, 悩み事を1番に打ち明けるのは大学の友人と大学以外の友人の

どちらかなどについて質問する項目であった。

「携帯電話上だけの友人について」は、携帯電話上の友人の有無、友人との出会い、携帯電話上だけの友人という人間関係の満足度、孤独感、携帯電話上の友人の必要性、携帯電話上で知り合った友人に会ったことがあるか、携帯電話上の友人と身近な友人との異なりなどについて質問する項目であった。

「交友関係（自己開示、自己隠蔽）について」は、尾崎、九東（2009）の研究を参考に質問紙を作成し、「携帯電話への依存について」は、土本、緒賀（2006）の研究を参考に質問紙を作成した。全質問項目は62項目であった。

分析は単純集計、クロス集計および因子分析（主因子法、バリマックス回転）を SPSS で行った。

結 果

情報伝達機器の使用について

集計の結果、携帯電話の所持率は100%と回答者360名全員が所持していた。携帯電話の購入年齢については、15歳の時という回答が最も多く、全体の40%を占めている。1日のパソコンの利用時間および携帯電話の1日の使用時間について結果を表1に示した。パソコンの利用時間では30分から2時間の間がすべて20%以上であった。携帯電話の使用時間は、3時間以上が33.3%と最も多く、次に1～2時間が23.6%であった。

表1 パソコンおよび携帯電話の1日の使用時間

	30分未満	30～1時間	1～2時間	2～3時間	3時間以上
パソコンの使用時間	28.3	21.1	21.9	14.2	14.4
携帯電話の使用時間	10.0	13.3	23.6	19.7	33.3

パソコンは大学における学習および課題遂行のために必要な時間を利用している可能性が高く、2時間以内での利用が多いことが認められる。1日のメール数については表2に示した。

表2 1日のメールの平均送信数

	10通以内	10～20通	20～30通	30～40通	40～50通	50通以上
1日のメールの平均送信数	55.8	25.0	10.0	3.6	3.6	1.9

1日のメールの平均送信数は10通以内という回答が全体の半数以上を占める55.8%であった。

また1日の異なる人とのメールのやり取りの人数は5人未満という回答が93.3%であることから1日にメールのやり取りをする人数は、数人であるということが示された。

携帯電話の利用項目について複数回答を求めた結果、メールが最も多く300名以上であった。次はブログで150名程度、SNSで130名程度の利用であった。大学生は、携帯電話を使用したメールを利用することが多いことが認められる。

表3 交友関係意識項目の因子分析結果

	成 分			
	1	2	3	4
問34. 自分が友達からどう思われているのか、気になる	.820	.092	.004	.048
問36. 友人関係で自分が傷つくのを恐れている	.818	.125	.073	.046
問35. 友達に間違いを指摘しにくい	.728	.129	-.075	.202
問37. 友達と意見が異なる時は、相手に合わせてしまうことが多い	.693	.133	.047	.121
問33. 思っていることを友達にはっきり言えない	.580	.218	-.081	.370
問44. 集団に溶け込めない	.131	.862	-.121	.225
問42. 友達をつくるのが苦手だ	.183	.860	-.112	.100
問43. 自分に自信がないので、人間関係が上手く作れない	.264	.848	-.071	.192
問38. 悩みや問題がある時は、友達に相談する	-.012	-.108	.775	-.207
問40. 自分の恋愛経験について、友達に話す方だ	-.044	-.171	.773	.039
問39. 友達は自分の悩みや気持ちをわかってくれている	-.083	-.153	.732	-.172
問47. 悲しいことはできるだけ人に聞いてもらいたい	.116	.080	.688	-.081
問48. 直接話すよりも、携帯メールの方が気持ちを伝えやすい	.124	.197	.292	.464
問46. 自分のことを人に話すことに抵抗を感じる	.250	.291	-.210	.649
問45. 自分について人に話していないことがある	.031	.240	-.211	.739
問41. 自分の進路についての迷いや不安は、友達に話さないほうである	.211	-.056	-.224	.593

交友関係についての16項目について主因子分析（主成分分析，バリマックス回転）を行った。その結果、4因子が抽出された。第1因子は、友人関係で自分が傷つくのを恐れたり、友達からどう思われているのか気になるというように、友人からの評価に敏感で傷つくのを回避する傾向を表しているため、「評価過敏・傷つき回避」因子とした。第2因子は、友人作りが苦手で、

集団に溶け込めないというように、関わりが苦手な傾向を表す因子で、「関わり苦手意識」因子とした。第3因子は、悩みや問題を友人に相談したり、恋愛経験を話したりというように、深いレベルでの自分自身を相手に伝える傾向を表しているの、「自己開示」因子とした。第4因子は、自分の進路についての迷いや不安は、友達に話さない、自分について人に話してないことがある、自分のことを人に話すことに抵抗を感じるなど、深いレベルでの自分自身を相手に隠蔽する傾向を表しているの、「自己隠蔽」因子とした。因子分析の結果は表3に示した。質問項目について、男女によるクロス集計と χ^2 二乗分析を行った。第1因子の質問項目「友達と意見が異なる時は、相手に合わせてしまうことが多い」において有意差が認められた($\chi^2 = 14.148$, $df=4$, $p<0.01$)。また第3因子の質問項目「自分の恋愛経験について、友達に話す方だ」において有意差が認められた($\chi^2 = 16.277$, $df=4$, $p<0.01$)。男女の比較を図1, 2に示した。

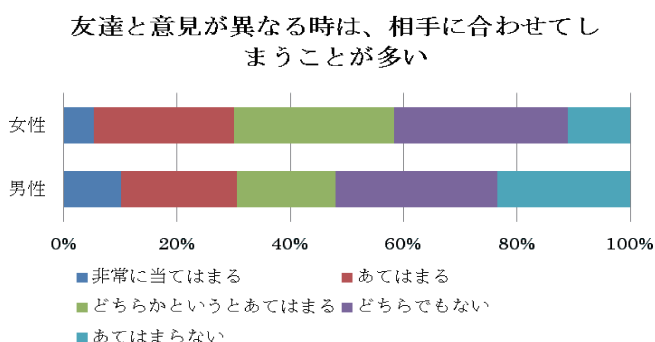


図1 「友達と意見が異なるときは、相手に合わせてしまうことが多い」回答の男女比較

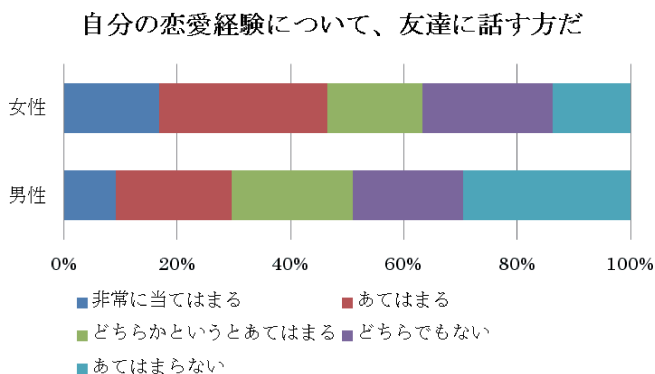


図2 「自分の恋愛経験について、友達に話す方だ」の回答男女比較

図1では男性より女性のほうが相手に合わせることが多く、「評価過敏・傷つき回避」行動を行うという結果であった。図2では、男性より女性のほうが恋愛経験を友人に話すという結果であり、「自己開示」が高いという結果であった。

友人関係についての質問では、大学の友人は5人以上が30%で最も多く、2, 3人、3, 4人が20%以上であった。大学で親友と呼べる人数は2人以内と2, 3人が20%以上であった。大学以外の友人は5人以上が79.7%と最も多く、大学以外での親友と呼べる人数では、2, 3人が28.6%で5人以上が26.7%という結果であった(表4)。結果から、大学よりも大学以外での友人が多く親友と呼べる人数も大学以外で多く存在していることが示された。さらに、悩みを打ち明ける友人では、「大学の友人」「どちらかという大学の友人」で33.6%「どちらでもない」25.6%、「どちらかという大学の友人」「大学以外の友人」40.8%とやや大学以外が多くなっている。また大学と大学以外の友人の違いについては、「非常に感じる」「感じる」で52.8%で「どちらでもない」19.7%「感じない」「まったく感じない」で27.5%と、大学と大学以外の友人では違いがあることが認められた。

携帯電話の依存についての質問項目結果を表5に示した。携帯電話に対する依存については「あてはまらない」の回答が多く、携帯に依存しているほどの回答は得られなかった。

表4 友人関係の質問回答一覧

	いない	2人以内	2から3人	3から4人	4から5人	5人以上
大学で一緒に生活している友人の人数	2.8	5.8	24.2	23.3	13.6	30.3
大学で親友と呼べる友人の人数	16.7	22.2	24.7	11.4	8.6	16.4
大学以外での友人の人数	1.4	1.7	5.3	6.1	5.8	79.7
大学以外で親友と呼べる友人の人数	5.6	19.7	28.6	10.8	8.6	26.7
	大学の友人	どちらかという大学の友人	どちらでもない	どちらかという大学の友人	大学以外の友人	
悩みを事を1番に打ち明ける友人	16.9	16.7	25.6	23.6	17.2	
	非常に感じる	感じる	どちらでもない	感じない	全く感じない	
大学と大学外での友人の違い	12.5	40.3	19.7	21.7	5.8	

表 5 携帯電話依存に関する質問の回答一覧

	非常に当てはまる	あてはまる	どちらかというにあてはまる	どちらでもない	あてはまらない
携帯電話を忘れると一日中不安	12.5	18.9	26.1	18.1	24.4
家の中でも携帯電話を肌身離さず持ち歩く	10.6	13.1	15.3	16.7	44.4
どんなところでも携帯電話の電源を切りたくない	10.8	14.4	13.3	20.6	40.8
電話やメールの着信がないか何度も確認することがある	6.1	11.9	22.8	23.1	36.1
暇があれば、とりあえず携帯電話を触る	17.5	28.9	26.1	12.8	14.7
携帯電話の電波の届かないところには行きたくない	5.8	10.8	15.0	20.8	47.5
携帯電話の電源が切れないように気をつけている	21.1	28.9	17.8	9.2	23.1
相手からのメールの返信が遅いと不安になる	4.4	15.0	25.6	24.2	30.8
メールをしていると相手と繋がっている気がする	3.9	13.6	24.4	31.1	26.9
授業中でもメールをする	7.5	19.2	23.1	17.5	32.8
用事もないのにメールをする	3.9	10.0	11.1	18.6	56.4
用事もないのに相手の携帯電話に電話をしてしまうことがある	2.5	7.5	4.7	11.9	73.3
夜遅くても、携帯電話を使って連絡をすることがある	9.2	19.2	19.7	15.3	36.7
携帯電話を忘れると取りに帰る	6.7	12.8	20.3	19.7	40.6

ま と め

近年、SNS やブログなどインターネットを通して、同じ趣味を持つ人や気の合う人と簡単に人間関係を築くことができるようになった。これらの人間関係は文字コミュニケーションから始まっている。本研究において、インターネットを通じた携帯電話上だけの友人がいる学生は全体の3割と少ない結果が出ている。これは、実際の友人との関係に満足している学生が多いため、携帯電話上だけの友人を求めていないと考えられる。また、携帯電話上に友人がいる学生においても、その友人と実際に会ってみたいと回答した学生は3割であることから、携帯電

話上の友人は携帯電話上だけというように割り切った人間関係を築いている学生が多いようである。学生は対面でのコミュニケーションが取れる相手と深い人間関係を築いていると思われる。しかし、同じ対面でのコミュニケーションにおいても、「評価過敏・傷つき回避」と「自己開示」においては男女で差が認められる行動が示された。また大学内と大学以外では友人の違いを感じる学生が全体の半数を占めている。学生は悩みごとなどがある場合、大学以外の友人に一番に話すという結果を示した。学生は、携帯電話などのコミュニケーション手段があり簡単に円滑な人間関係を築いていると思えるが、交友関係において「評価過敏・傷つき回避」「関わり苦手意識」をもち、人との関りを苦手としている学生が多いことが認められた。しかし、対面コミュニケーションを行う友人に対して、人間関係が円滑にいくことを優先するがために、自分の気持ちや考えをきちんと伝えることを避ける「自己隠蔽」の傾向が強いという結果が示された。この結果から友達の評価に過敏となり、友人関係で自分が傷つくことを恐れる学生が多く存在することが認められた。今後ゼミなどの学生個別指導において、学生の傾向を認識した指導を行う必要があることが示唆されている。

謝 辞

本論文は2011年度生活デザイン・情報学科 桑村さんのアンケート結果を利用して集計・分析を行ったものです。記して感謝いたします。

参 考 文 献

1. 尾上恵子 (2007)『女子学生の人間関係構築における諸要因について』一宮女子短期大学紀要 第46集 15-22
2. 尾上恵子 (2006)『大学生のコミュニケーション能力と感情の社会的共有行動の関連性について』一宮女子短期大学紀要 第45集 17-25
3. 尾崎かほる・久東光代 (2009)『女子大学生の友人に対する対面と携帯メールによる自己開示交友関係意識』日本女子大学紀要 人間科学部 第20号 61-72
4. 土本亜矢子・緒賀郷志 (2006)『大学生における携帯電話依存傾向と内的対象想起との関連』岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 第55巻 第1号 217-226
5. 鎌田浩子・高橋尚子 (2006)『大学生のパソコン・携帯電話利用の現状と課題』北海道教育大学釧路校研究紀要 第38号 103-112
6. 小坂守孝 (2007)『大学生のインターネット・携帯電話利用に関するストレスと、ハーディネス・ストレス反応との関係』北方圏生活福祉研究所年報 第13巻 33-40
7. 足立由美・高田茂樹・雄山真弓・松本和雄 (2003)『携帯電話コミュニケーションから見た大学生の対人関係』関西学院大学教育学科研究年報 第29号 7-14
8. 奥村和則 (2009)『携帯電話の形状変遷と使用状況の変化』岐阜市立女子短期大学研究紀要 第58号

135-138

9. 尼崎光洋・煙山千尋・清水安夫 (2009) 『大学生の携帯電話の E メールの使用に対する意思決定バランス尺度の開発』学校メンタルヘルス Vol.12 No2 81-86
10. 河野和明 (2008) 自己隠蔽尺度 (Self-Concealment Scale) および抑制的会話態度尺度の尺度特性—記述統計と因子分析— 東海学園大学研究紀要 第13号 45-52
11. 中村 功 (2002) 『携帯メールと孤独』松山大学論集 第14号 85-99
12. 古谷嘉一郎・坂田桐子・高口 央 (2005) 『友人関係における新密度と対面・携帯メールの自己開示と関連』対人社会心理学研究 第5号 21-29
13. 九里徳泰 (2005) 『携帯電話による E ラーニングを活用した大学多人数講義での運用実験』メディア教育研究 1 (2) 145-153
14. 富田英典・南田勝也・辻 泉 (2007) デジタルメディア・トレーニング 有斐閣選書
15. 土田米一 (2010) ケータイ白書2011 株式会社インプレスジャパン
16. 山本憲央 (2010) ケータイ社会白書 中央経済社